

歳首 自一月一日 自十二月二十五日  
至同 七日 至同 三十一日

日曜日及祝祭日

本校設置紀念日

文庫内整理及掃除日 毎月一日 十五日

曝書期 夏期休業中 三十日間

但臨時閉鎖ハ其都度之ヲ揭示スベシ

第十九條 本校ノ職員生徒ニシテ文庫收藏品ヲ借覽スルモノハ定式

ノ願書及證書ヲ差出スベシ

第二十條 借覽員數ハ職員ハ五品以内生徒ハ二品以内トス

第二十一條 借覽期限ハ職員生徒共三十日以内トス

第二十二條 借覽期限満チ尙引續キ借覽使用セントスルトキハ一旦

現品ヲ返納シテ更ニ借覽ノ手續ヲナスベシ

但他ニ同種種ノ借受ヲ請フモノアルトキハ繼續借覽スルコトヲ

得ズ

第二十三條 借覽期限中ノ物品ト雖本校ニ於テ要用アルトキハ隨時

返納セシムルコトアルベシ

第二十四條 借覽使用シタルモノ旅行セントスルトキハ期限内ト雖

旅行前一旦現品ヲ返納スベシ

第二十五條 借觀シタル圖書標本類ハ他ニ轉貸スルヲ許サズ

但教員ニシテ授業上ノタメ其教室内ニ於テ生徒ヘ貸付スルハ此

限ニアラズ

第二十六條 職員退職若クハ轉職シタルトキハ其借受セル圖書標本

ヲ直ニ返納スベシ 生徒ガ退學若クハ休學スルトキ亦同ジ

第二十七條 借覽使用ノ物品ハ總テ大切ニ取扱フベシ 誤テ之ヲ亡

失シ或ハ汚染毀損スルトキハ同一ノ物品若クハ相當ノ代價ヲ以テ

之ヲ辨償セシムベシ 該件未了ノ間ハ更ニ他ノ物品ヲ借受スルコ

トヲ得ズ

第二十八條 返納期日其他規定ノ手續ヲ怠リタルトキハ爾後閱覽及

借覽ヲ停止スルコトアルベシ

(『東京美術學校一覽 從明治三十八年  
至明治三十九年』)

『東京美術學校校友会月報』記事抜粹

東京美術學校近事〔三十四号。M・三八・一・三一〕

○石川、竹内兩教授の敘勲 教授石川光明竹内久一の兩氏は、昨明治三十七年十二月二十七日、勲六等に叙せられ、瑞寶章を授けられたり。

○三教授の昇等 昨年十二月七日、久米〔桂一郎〕教授は高等官四等に、岩村〔透〕教授は高等官五等に、大村〔西崖〕教授は高等官七等に、何れも昇等せられたり。

○渡邊裁縫學校長の銅像製作 同氏銅像の製作を本校に依頼せられたるに付、黒岩〔倉吉〕助教は原型の製作主任を命ぜられ、津田〔信夫〕助教は其鑄造主任を命ぜられ、過日來原型の製了を見たるを以て、目下鑄金工場に於て鑄造に著手中なり。

○職員の年賀交換會 例に依り、本校職員一同は、一月一日本校に會し、年賀交換會を開きたり。

○石井〔吉次郎〕助教の昇任 戦地に在る同氏は、一月十三日、

中尉に昇任せられたり。

東京美術學校近事〔三一五。M・三八・三一三〕

○千頭〔庸或〕助教の近況 同氏は從來第三軍司令部付にて出征中なるが、先頃一等計手に任ぜられて經理部付を命ぜられ、一月廿四日旅順方面を出發し、目下遼陽城内に在りて職務に執筆せらるゝといふ。

○岩村〔透〕、大村〔西崖〕兩教授の歸朝期 兩氏は前號通信欄に報じ置きたる如く、英京倫敦に滯留中なりしが、それより佛國、獨國、伊太利等を経て、來三月廿五日頃には、本邦へ歸著せらるべき豫定なりといふ。

○本校の戰捷祝賀會 二月十日は客歲宣戰 詔勅煥發の日なるを以て、此一週年紀念日を卜し、本校職員生徒諸氏一同は、戰捷祝賀の意を表するため、校友會俱樂部に集りて其式を擧げたり。其次第は先づ校長の祝辭ありて古來我邦が外國との戰爭に於ける原因沿革を説かれ、延きて今回の戰役に就ての所感と連捷の賀意を述べられ、了りて生徒總代毛利教定氏の祝辭、次ぎて感謝狀贈呈に關する評議をなしたるに、全員拍手喝采を以て之を贊成し 御眞影奉拜、萬歲三唱にて式を終り、和氣霽々の裡に會食して散會せり。感謝文祝辭左に。

海軍感謝狀文

今茲一月二日露國東洋艦隊全ク滅シテ旅順口遂ニ陥ル是レ

皇上ノ威德ニ因ルト雖抑亦閣下ノ深謀遠慮ヲ以テ我忠勇ナル將士ヲ率并

ルニ非ズンバ焉ソク此偉功ヲ收ムルコトヲ得シヤ 夫レ惟フニ旅順口ハ露國ガ據テ以テ東亞侵略ノ策源地トナス所ナリ 故ニ陸ニハ十萬ノ將卒天險ニ據リ海ニハ數十ノ鐵艦不虞ニ備ヘ防禦ノ術一トシテ完カラザルナク加之風濤ノ險亦攻ムルニ易カラサルモノアリ 然リ而シテ客歲二月征露ノ役起リ閣下我聯合艦隊司令長官ノ重任ヲ負フヤ常ニ陸軍ト協力シ寒暑ノ劇變ヲ凌ギ風濤ノ險惡ヲ冒シ或ハ港口ヲ塞キ或ハ海軍ヲ鎖シ奇謀妙策攻撃數次遂ニ強露ノ艦隊ヲ殲滅シ我海軍ノ名聲ヲシテ宇内ニ赫灼タラシメ威風ノ犯スベカラザルモノアルヲ示セリ 閣下ノ辛勞功績感歎謝スルノ辭ヲ知ラザルナリ 我校茲ニ宣戰 詔勅煥發ノ第一回紀念日ヲトシ其戰捷ノ賀意ヲ致スト共ニ閣下ヲ始メ將卒諸士ノ偉績ヲ頌シ前途ノ健康ト成功トヲ祈ルト云爾

明治廿八年二月十日

東京美術學校長 正木 直彥

聯合艦隊司令長官 東郷平八郎殿

陸軍感謝狀文

十萬ノ將卒天險ニ據リ數十ノ鐵艦海軍ヲ護リ加フルニ精新ヲ盡シ巧智ヲ極メタル銃砲堡壘ノ備ヘヲ以テス 旅順口要塞ノ難攻不拔ト誇稱セシモノ實ニ以ヘナキニアラサルナリ 然リ而シテ客歲二月征露ノ役起リ閣下其攻圍軍司令官ニ任セラレ日夜寢食ヲ忘レテ軍務ニ執筆スル數閱月將士爲ニ奮ヒ水陸相應ジ遂ニ鐵城ヲ壞リ堅壘ヲ碎キ難攻不拔ノ語ヲシテ空ニ歸セシメ敵將ヲシテ于戈ヲ擲チテ降ヲ乞ヒ命ヲ奉スルニ至ラシム是レ 皇上ノ稜威ト將士ノ忠武勇猛ニ由ルト雖抑亦閣下ノ指揮籌策宜シキヲ得ルニ非ズンバ焉ソク斯ノ如キ偉大ノ功績ヲ奏セシヤ 閣下ノ辛勞功績感歎措ク所ヲ知ラサルナリ 我校茲ニ宣戰 詔勅煥發ノ第一回紀念日ヲトシ其戰捷ノ賀意ヲ致シ併セテ閣下ヲ始メ將卒諸氏ノ健康ヲ禱リ

偉功ヲ頌スト云爾

明治卅八年二月十日

東京美術學校長 正木 直彦

第三軍司令官男爵 乃木希典殿

生徒總代祝辭

極東ノ平和一タビ破レテヨリ皇師ノ向フ所陸ニ海ニ戰フテ勝タザルナク  
攻メテ取ラザルナシ 今ヤ敵ノ精銳無比ト恃ミタル東洋艦隊ハ全滅ニ歸  
シテ我海軍ノ名聲益揚リ難攻不拔ト誇リタル旅順要塞モ亦全ク我有ニ歸  
シテ我陸軍ノ勇名彌々著ハル 進ンデ浦鹽ヲ屠リ奉天ヲ陷井レ敵ヲシテ  
滿洲ノ野ニ隻影ナキニ至ラシムル蓋シ遠キニアラサルベシ 嗚呼昨ハ東  
亞ノ一小國トシテ我ヲ輕視シタルモノヲシテ今ハ世界ノ一強國トシテ畏  
敬スルニ至ラシム 是一ニ我

天皇陛下ノ稜威ト忠勇ナル陸海軍諸將士ノ賜ニシテ吾人ノ謹ミテ奉賀シ  
感謝スル所ナリ 吾人幸ニ明治ノ盛代ニ生レ此國運動興ノ機ニ會ス、ヨ  
シ武ヲ以テ報國ノ誠ヲ致スコト能ハザルモ亦別ニ盡スベキ任アリ 古人  
謂ヘルアリ 文武ハ車ノ兩輪ノ如シト 今ヤ我海陸同胞ノ諸士外ニ在リ  
テ類リニ戰捷ノ功ヲ奏ス 吾人内ニアリテ職ニ美術ニ從フ者宜シク研鑽  
刻苦シテ以テ我カ美術ノ大發展ヲ圖リ相呼應シテ益國威ノ發顯ニ力ムベ  
シ 是レ吾人ノ任ナリ 吾人ノ期スベキ所ナリ 今日コノ盛筵ニ列シ謹  
ミテ祝意ヲ表シ聊カ懷抱スル所ヲ綴フ

生徒總代 毛利 教定

明治三十八年二月十日

○本校文庫規則の改正〔298頁に既出につき省略。〕

○校友會恤兵展覽會開設計畫 本校校友會に於て、恤兵展覽會を開

かんとせしは、昨年十一月企畫せし處なるが、都合に依りて本年に  
延期し、文部省及本校の許可を得ば、來る四月上旬に於て之を開設  
せんとて、先頃の委員會にて其規則等を左記の如く内定したり。

東京美術學校々友會恤兵展覽會規則

第一章 組織及目的等

第一條 本會ハ東京美術學校々友會恤兵展覽會ト稱シ其純益金ヲ

恤兵部ヘ寄附スルヲ以テ目的トス

第二條 本會ハ東京美術學校々友會員ヲ以テ組織ス

第三條 本會ノ會場及ビ開會期日左ノ如シ

會場 東京美術學校内

期日 自明治三十八年三月三十日

至同 四月 八日

第二章 役員

第四條 本會ニ會長一名、副會長一名、鑑查委員長一名、鑑查委

員若干名、庶務掛、會計掛、出品掛、陳列掛、接待掛、賣約

掛、通券掛、會場掛、調査掛、記録掛ヲ設テ各掛ニ各掛長一名

ヲ置ク

第五條 本會長ニハ東京美術學校校友會長ヲ推戴ス

第六條 會長ハ本會ヲ綜理ス

第七條 副會長ハ會長ヲ補佐シ會長事故アルトキハ代理ス

第八條 鑑查委員長ハ各部ノ鑑查ヲ監督ス

第九條 鑑查委員ハ各其部出品ノ鑑查ヲ掌ル

第十條 各掛長ハ各其部ヲ監督ス

第十一條 各掛ノ分掌左ノ如シ

庶務掛ハ本會全體ニ關スル事務ヲ掌ル

會計掛ハ物品及金錢ノ出納ニ關スル事務ヲ掌ル

出品掛ハ出品ノ受付還付等ニ關スル事ヲ掌ル

陳列掛ハ陳列ノ準備會場ノ裝飾付札等ニ關スル事ヲ掌ル

接待掛ハ來賓ノ接待及來觀者ニ關スル事ヲ掌ル

賣約掛ハ出品ノ賣約ニ關スル事ヲ掌ル

通券掛ハ觀覽券配付ニ關スル事ヲ掌ル

調査掛ハ即賣物ノ調査ヲ掌ル

會場掛ハ會場内外ノ取締ヲ掌ル

記録掛ハ本會施行上ニ於ケル顛末ヲ記録スル事ヲ掌ル

### 第三章 出品

第十二條 本會ニ出品スルモノハ校友會員ニ限ル

但シ卒業生ニシテ有志ノ者ハ出品スルヲ得

第十三條 出品ハ鑑査ノ上陳列スルモノトス

第十四條 出品者ハ三月二十日迄ニ所定ノ出品目錄ヲ三月廿九日

迄ニ現品ヲ出品掛ニ差出スヘシ

第十五條 出品物ノ裝飾ハ自辨トシ各自ニ於テ之レヲナスモノト

ス

第十六條 出品ハ賣品非賣品ノ二種トス

第十七條 出品賣約ノトキハ約定金トシテ賣價ノ三割ヲ領收シ閉

會後三日以内ニ受渡ノ手續ヲ了スヘシ

第十八條 出品賣約濟ノ時ハ出品者ヨリ其價ノ二割ヲ本會ニ納付

スルモノトス

第十九條 出品賣約者ハ閉會後二日以内ニ賣約書及賣約殘金ヲ持

參シ其受取方ヲ本會へ申出ベキモノトス

第廿條 出品者ハ閉會ノ翌日出品ヲ受取ルヘキモノトス

第廿一條 出品者ニシテ遠隔ノ地ニアリ返送ヲ乞フトキハ其返送

料ハ自辨スヘキモノトス

第二十二條 出品物ハ丁寧ニ保管スヘシト雖避クヘカラサル天災

等ノ場合ハ本會其責ニ任セス

### 第四章 附則

第二十三條 展覽會閉會ノ際ニ於ケル跡片付ハ各掛ニ於テ各其責

ニ任スヘキモノトス

第二十四條 恤兵金ハ本會ノ名義ヲ以テ陸海軍ノ恤兵部へ寄付ス

ヘシ

第二十五條 展覽會閉會後ハ其狀況ノ記録ト共ニ金錢ノ出納ヲ報

告スルモノトス

(出品目錄書畧ス)

### 教室雜俎 (同)

◎彫刻科一年 いでませる彫刻科一年、曾つて此校に學びて、はや、二歳なるべきに、未だに、月報欄など、其一部をも汚せしことの更になき、斯くまでに、もの靜かに、斯ばかり寂しかるにや、實に無趣味なりける哉と想はれつらん、而れど、眞、さには候はじよ、此所にも、物言ふ人の數多集へるものを、などて其儘にや過すべき、いで書きつらねみん乎、さて遅ればせには待れど、何時なりけん、時や寒く、空薄曇りて、颯々、樹の間を掠めて、吹く風も冷たく、窓の硝子の「ガタリ、ピシヤリ」動物園の騒がし

き、鳥や獸の啼叫ぶ聲に和して、斯かる折の例として、ストーブの周りは、賑やかに圍まれつ戦争のはなし、美術の談、技術家の品評、はてはたわいもなき、話しに移りて、あわれ、鬚面の二十男、さても無邪氣なものなりける、折柄鬻然、一發午砲の響、はや午なりけるよとあるに、中に、印度の留學生にもやと、想はるゝ人の、晝飽せん、食堂迄行くも大儀なり、いで此所にて窃にすまさばやと、傍の苞、取寄するを觀れば、之はしたり、大重箱に飯はひしと、花見など行けるこゝちにて、幾人の辨當ぞと怪しめば、さりとは、すましたものいつの間にか、お一人にて「ペロリ」、さてもく、やがて、腹のはり召さるにや、伸して起ち上りけるが、其時、誰やらの惡戯窃かに背ろの腰掛引きのくれば、左様とは知らず、復び、舊に座らんとして、「ドシン」、重心はづれて仰向様、重箱片手に、箸片手、大男の此様、廣きお江戸に、もあまり見られじとこそ聞く、ようくにして起ち、傍らの朽ちふりたる、椅子に腰をろせば、こはそも如何に、「ミシク」、亦しても「ビシャーリ」と。此君ぞ、全校を擧げて知らぬ人もなき、二十三貫其君にて在しませける。斯くて、我校をあけて、唯一の名物男を持てる、我クラスは、いやましに、變れる人の多き、よろづ通に入らせ給ふ、唐より歸化せりと申す人、あるは、黒鳩公、暹羅の皇太子など、教室はいつも賑はぎて、春のそのの如く、外吹く冷たき風も、此所のみは透き能はじとか矣。(芝の峯)

◎圖案科 一外人間の言葉癖は妙なもので、随分變なのもあれば、あるもの(古田〔立次〕)だから今初春のお笑草までに、圖案一年の面々のを並べると、先づ癖のない者は更にないし、や(岡〔雅雄〕)其内

や、(別役〔良民〕)可笑しいは鳥〔齊〕君の無人、島博士、で何の意味やら理解に苦しむ、(仙石〔貫造〕)古河梨頭の藤田〔郁太郎〕氏のかつばらうなどは物騒千萬だ、こんな事を言ふと早速大川にや、蓋がな、いぜと怒るかも知れぬ、小川〔巽〕鳥海〔豊〕兩君のは同じあ、う、そ、う、か、だ、馬食の本元有瀬〔卯来雄〕君の飯くひ、行かうは音に響いたもので(聲が大きいから)其言のみならず、萬事その、(仙石)流で大聲だ、ストーブ會議で、此の話が出ると岸〔熊吉〕君はヒ、ヒ、ヒ、ヒ、ッと笑ひ、永榮〔定義〕君はまだ可笑しいと唸る、未だあるが餘り投書すると、何によ、(別役)ぶち殺すぞ、(永榮)と怒られる恐れがあるから、これで御免を蒙むる、(華林)

#### 東京美術學校近事〔三一六。M・三八・三・三一〕

- 大村〔西崖〕教授の昇叙 二月二十日、從七位に叙せられたり。
- 海野教授の改名 教授海野子之吉氏は、先般其名を美盛と改められたり。
- 大村〔西崖〕教授の歸朝 同氏は兼て歐米出張中なりしが、三月五日歸朝せられたり。
- 本校規則の改正 本校規則は愈々今回改正したり。此改正に伴ひて従來と異なる大要を擧ぐれば左の如し。但詳細は規則〔285頁参照〕を熟覽せらるべし。

一従來第一條によれば、「各科専門の技術家及普通圖畫教員たるべき者を養成する所とす」とありしを、猶之に加ふるに實業學

校の圖案、彫刻、金工、漆工の教員たるべき者をも養成するの文字を加へたり。されどこは是迄の實際を文字に現はしたるまじなり。

一各科の中に於て從來彫金、鍛金と分立せしを合せて、金工科と改め、鑄金科を鑄造科と改稱せり。其他の各科に増減改定なし。

一從來の假入學の稱を廢して、豫備課（修業期間は四月より七月迄一學期）を置き、本科を四ヶ年とし、別に卒業期二期を設け、此期間は専ら卒業製作に従事せしむることゝなれり。即豫備課より前後通じて滿五ヶ年となる譯にして、卒業の期は毎年三月となれり。

一豫備科及本科の學科課程にも、多少の改正あれども、煩を省きて茲に之を贅せず。

一入學者は選科の外は、總て豫備科を経ざれば、入學することを得ざることゝなりたるを以て、從來六月下旬に行ひたる中學校卒業生等の、競争試験は從て行はざることゝなれり。但選科生を募集する場合に於ての試験期日は從來の如く六月末なり。

一入學在學退學規程、試験規程、研究科規程、授業料及其他の規程等にも多少の改正あり。

一休學規程を設けて、五ヶ月以上の休學を許可するを得ることゝなれり

一選科の入學志願者は從來實技の試験のみなりしが、今回其學力を高等小學四年又は中學校二年修了以上の者と定め、其經歷なきものは、本校にて學力試験をも行ふことゝなれり。

一講習科に入學を許すべきものは從來圖畫教員のみなりしが、今回は猶其範圍を擴めて、實業學校の教員をも入學するを得ることゝなれり。

一聽講生規程を新設して、每學年開始前に聽講を許すべき學課目を公示し、生徒以外の希望者にして、相當の學業履歷ある者の出席を許すことゝなれり。

一授業料の納期は、從來九月、十一月、二月、四月の四回なりしを、九月、一月、四月の三回に改めたり。

以上の改正は來四月よりは、先以て豫備科等に實施し、九月より全體に施行せらるるといふ。

○縮刻器械と八曲小屏の展覽 本校に於ては、三月六日午前九時より午後四時迄、東京學士會院を借受けて、十八大家の作に成れる八曲小屏及古畫を陳列し、又先年佛國より取寄せたる縮刻器械の運輸をなし、メダルの參考品と共に、關係ある知名の人士並に新聞記者を招きて展覽せり。來觀者三百餘名にして、八曲小屏の品題及作者を記せば左の如し。

(應眞) 橋本 雅邦	(矮子) <sup>[矮]</sup> 高村 光雲	(寒景) 川端 玉章
(芳宜) 安藤重兵衛	(朱鳥) 海野 勝珉	(雙雄) 川之邊一朝
(錦輪) 荒木 寬畝	(座魚) 山田 宗美	(綠扇) 宮川 香山
(司長) 石川 光明	(爽氣) 佐竹 永湖	(紫袖) 香川 勝廣
(華麟) 加藤 陶壽	(化鵬) 竹内 久遠	(蔚林) 野口 小蘋
(瑞雪) 瀧川 惣助	(凌雲) 大島 如雲	(錦袖) 白山 松哉

因にいふ、右の命名は大槻如電氏、考按は島田佳矣氏なり。

○豫備科授業擔任 前號に記したる本校改正規則に依りて、今回實施せらるべき豫備科生徒の授業受持は、三月十八日左の教員諸氏に定められたり。

(毛筆畫、用器畫) 岡田秀△(毛筆畫) 鶴田幾太郎△(木炭畫)

和田英作△(同) 藤島武二△(同) 長原孝太郎△(塑造) 白井保

次郎△(同) 黒岩倉吉△(同) 水谷鐵也△(歴史) 大村西崖△

(外國語) 久米桂一郎、岩村透△(體操) 玉田文作

○高村〔光雲〕教授の出張 同教授は内務省古社寺保存會の調査事務に關し、同省より大分、福岡、熊本の三縣下へ出張を命ぜられ、

三月二十五日東京を出發し、四月十八日歸京せられたり。

○岩村〔透〕教授の歸朝 岩村教授は、三月二十七日、無事歸朝せられたり。

○休職満期 助教河邊正夫氏は去三月末休職満期となりたり。

○雇員の異動 雇鹽崎重一氏は、依願解雇せられ、雇田中徳之介氏は、教務掛を解きて躰操助手専務を命ぜられ、新に佐々木丸治氏本校雇、教務掛を命ぜられたり。

○校友會恤兵展覽會 同會は四月一日より同月七日まで、本校教室の一部に於て開會せり。開會許可の都合にて愈確定して準備に取

かりたるは、三月廿日頃なりしかば、思ふにまかせぬことの多かりしかども、會員諸氏の奮勵と熱心とは、能く此短日間に設備を整

へ、製作をもなしたるなど、誠に感ずべきものあり。さて愈開會となりし四月一日は朝來の雨ふりやまず、二日は雨は歇みたれど空合

宜しからず、氣候も寒さを覺え、花の頃とは思はれざるほどにして、引續き三日以後も降雨と雨陰りにて、大同小異の天候なりしは、本會に取りて此上なき遺憾のことなりけり、たゞ最終の七日に至りて、半晴の天候となりしは、せめてもの心やりにぞありける。而して本會に於ける委しきことは、未だ悉く取調べもつかざれば、今茲には大躰を報告し置くことゝせん。但し即賣品は數ふるに違あらざれば、其點數は畧しぬ。

△來觀人員調

日	特別券	普通券	卒業生	雜	計
一日	七六	二二八	六	〇	三一〇
二日	二七九	九八四	一四	一四	一、二九一
三日	三〇五	一、四一七	一二	一七	一、七五一
四日	二〇七	八二二	八	〇	一、〇三七
五日	四三五	一、六四六	一六	〇	二、〇九七
六日	三六一	九八五	一四	一	一、三六一
七日	五六四	二、一〇三	一八	二	二、六八六
計	二、二二七	八、一八五	八八	三四	一〇、五三四

△出品點數調

日本畫	百六十九點	西洋畫	百五十二點
彫刻	七十一點	圖按	百八十二點
彫鍛金	六十三點	鑄金	七十四點
漆工	四十四點	參考品	三十五點

合計 七百九十一點

△賣約金及即賣金高

日本畫 賣約高 金五拾六圓  
即賣高 金百六拾九圓五錢

西洋畫 賣約高 金拾參圓  
即賣高 金六拾九圓貳拾八錢

彫刻 賣約高 金貳拾圓  
即賣高 金貳百六拾八圓參拾五錢

圖按 賣約高 金四圓  
即賣高 金貳百七拾參圓五拾參錢

彫金 賣約高 金拾壹圓  
即賣高 金百四拾壹圓四拾參錢

鑄金 賣約高 金七拾九圓  
即賣高 金五拾貳圓七拾錢

漆工 賣約高 金貳拾七圓  
即賣高 金百七拾圓貳拾參錢五厘

計 賣約高 金貳百拾圓也  
即賣高 金壹千百四拾四圓五拾七錢五厘

總計 金壹千參百五拾四圓五拾七錢五厘

○豫備科入學生 改正規則に依りて今回募集したる豫備科は、募集人員百名の豫定なりしが、志願者は其豫定數より超過し、百二十五名となれり。今其學校別を取調ぶるに、師範學校卒業生五人、公立中學校卒業生五十八人、私立中學校卒業生三十四人、工業學校卒業生十一人、工藝學校卒業生十七人なりといふ。其受持教員は前項に記載したる諸氏にして、四月十七日より授業を開始せり。

○下村教授の消息 下村觀山氏は、三月三十日英國倫敦を出發して

佛國に向はれ、それより白耳義、獨逸、伊太利等の各地を遍歴して、技術を研磨し、來る十一月下旬には歸朝せらるゝ豫定なりといふ。詳細は通信欄の同氏通信に掲載せり。

○研究生旅行 研究科内規により左の三氏は學術優等の故を以て、本校より旅費を給與せられ、三月十五日奈良京都へ出張を命ぜられたり。

京都へ 西洋畫選科研究生 兒島虎次郎

同 同 庄野宗之助

京都奈良へ 彫刻本科研究生 高村光太郎

○東郷大將よりの答禮狀 去る二月十日、祝捷會施行の際に於ける決議に依り、東郷大將へ贈呈したる感謝狀に對し、左の通り答禮ありたり。

聯合艦隊過去の戦果に對し御鄭重なる頌詞を辱ふし感謝の至に不堪候前途の戦局に當りては尙益奮勉誓て輿望に副ふことを期すべく茲に御挨拶迄得貴意候敬具

三月二十日

聯合艦隊司令長官 東郷平八郎

東京美術學校校長 正木 直彦殿

東京美術學校近事 (三一八。M・三八・六・四)

○本校職員の動靜を録すれば左の如し。

四月二十五日、高村〔光雲〕教授は故陸軍騎兵少尉長岡護全氏の銅像原型製作主任を、白井〔保次郎〕教授、黒岩〔倉吉〕助教授、水

谷〔鉄也〕囑託は何れも同製作擔任を命ぜられたり。

四月廿八日、雇田中徳之介氏は、病氣にて依願解雇せらる。

五月九日、手塚義太郎氏本校雇を命ぜられ、舛操授業擔任を申付けられる。

○辻村〔延太郎〕助教の出張 同氏は前年來關係せられつゝある久能山修繕工事につき、四月二十日より一週間を以て出張せられたり。

○臨時休業 靖國神社大祭に付き、參拜の便を圖るため五月四日臨時休業したり。

○入學者科別人員の決定 本年九月より入學を許すべき各科人員は、今回決定せられたり。其科別は、

日本畫科	十八人	西洋畫科	廿五人
圖按科	八人	彫刻科	八人
金工科	十人	鑄造科	十人
漆工科	五人	計	八十四人

右の如く本科生の入學を許すべき筈なるも、日本畫科、圖案科、漆工科を除くの外に在りては、萬一本科生の志願者少きときは、選科生を募集して補缺する見込みなりといふ。

○豫備科入學生姓名 本年四月より本校豫備科へ入學を許されたるものは、計百二十七名（内二名本科より轉科）にして、本年は授業の都合上願書受付順によりて之を甲乙丙の三組に分ちて教授せらる。其組別及人名左の如し。

甲組

畠山次郎四郎△山下均<sup>〔鈞〕</sup>△大山文吉△清水太助△山岡隆芳△岡本一平

△多田亨△蒲生鐵男△大藤定介△北古賀順橋△内田伴二郎△武井横介△鈴木源吉△伊賀氏廣△岡田高郎△佐藤省吾△辻總吉△長谷川昇△小糸源太郎△矢内元藏△鈴木文衛△谷地政齋△辰巳銀二△大川隆男△下林繁夫△今野清三郎△北川九一郎△田邊至△廣瀬峰太郎△香田勝太△丹羽賢△井上六郎△戸部隆吉△岡田純二△三宮知義△建部純夫△安井厚△坂田徳雄△小原丕續△藤田嗣治△高田覺△古川茂一

乙組

山田清△菊池五郎<sup>〔野〕</sup>△岡郎勇治△大村周二△吉田清二△河野繁市△橋村宗一△兒島惺二△鈴木要△加藤與治△青木越雄△藍野精一△大野隆徳△足立季彦△戸田正夫△濱田盛基△桑村仲藏△新井完△中井金三△油谷達△山口亮一△猪飼公正△岩崎文七△阪井戒爾△佐々木直哉△脇龜太郎△三隅禎三郎△牛嶋敬三△山本喜三郎△加藤靜兒△佐藤勇三郎△中野隆一△大谷浩△窪島政男△三橋徳太郎△長尾純一△鈴木範三△小川長四郎△二木正雄△犬童鐵夫△飯田徳三郎△加藤景美△齋藤萌

丙組

沼田豊吉△黛新三郎△桑野寛△岩尾重正△三古谷儀市△渡邊素輔△菊池勘之助△畠山久吾△小寺健吉△清見陸郎△久保田享二郎△高多喜八△松村秀太郎△小川喬△濱谷榮次郎△山口義夫△庄子勇△吉野富雄△丹羽善五郎△益田和雄△清島長次△吉田文俊△鹽見勝造△大山逸八△太田靜一△金澤重治△井上寛三△中島彦△中溝四郎△三木榮△青山扶△藤井卓之△大島寛一△津村央喜△高橋要△野田武雄△安福自之進△水元重文△古東謙吉△岡一利△酒井泰一△長野靖彦

○花苑の新設 本校内に花園を設け、寫生などの用に供するため、花卉を植え付けんとは、兼ねてより企劃せられつゝありし所なるが、今回愈其地を文庫の側に相し、樹木を移植し、地を夷<sup>〔たいら〕</sup>げて二百餘坪を得、此にさゝやかながら、一の花園を作り、目下花卉の蒐集植付け中なり。完成しなば授業上の利便はさらなり、四時の眺め亦眼を怡ばすものありぬべし。

○日本海海戦の祝捷會 六月一日臨時休業し、職員生徒一同第一講義室に集會して、祝捷會の式を擧げたり。其式は例の如く先づ、正木校長の今回の海戦は國家の消長に關する海戦なりしに、我忠烈勇武なる海軍の力に依りて敵艦隊を撃破せしは、元冠<sup>〔冠〕</sup>の昔をも偲ばせて、壯絶快絶、慶賀すべきの至りなりとて、一場の祝賀演説を試みられ、次で、陛下の萬歲 東郷大將の萬歲、海軍の萬歲を唱へ、東郷大將に感謝狀を贈呈するの議を萬場一致にて可決し、了りて散會したり。

○本年の夏季講習會 兩三年來本校に於て夏季講習會を開かれたるが、本年は都合に依り開設せざることに決したりと。

○本年の卒業證書授與式 本年の卒業證書授與式は、七月十一日之を舉行し、例によりて、當日は各學校長、在京及近縣の卒業生諸氏、及新卒業生の保證人を招待し、卒業製作、並に成績品等を觀覽に供すべしといふ。

○辻村延太郎氏 同氏は昨年夏季にも山梨縣の依頼により、同地に出張して、漆器に關する講習を開かれしが、本年も亦七月中旬より

凡二週間同地に出張講習せられたき旨、山梨縣知事より依頼を承けたるを以て出張講習することゝなれりといふ。

東京美術學校近事〔三一〇〕 M・三八・八・一七

○本校教授の新任 從來圖按科の授業を囑託せられ居りし古宇田實氏は、六月十六日本校教授に任ぜられ、高等官六等に叙せられたり。

○岡田〔秀〕助教授 同氏は六月二十一日、教員檢定委員會臨時委員仰付けらる。

○銅像の製作 本校に於ては先頃西村勝三氏の銅像製作を依頼せられたるを以て、七月七日、高村〔光雲〕教授に原型製作主任を、白井〔保次郎〕教授、黒岩〔倉吉〕助教授、水谷〔鉄也〕囑託に原型製作擔任を、津田〔信夫〕助教授に鑄造主任を、坂口〔朧〕囑託に同擔任を命ぜられたり。

○本科入學生の決定 本年四月豫備科へ入學したる生徒の修了試験は、例の如く六月末より七月四日迄施行せられ、其結果として、百二十名許の中、左の六十七名に本入學を許可せられ、其他は規則によりて、在學の資格消滅したり。今本入學を許されたるものゝ科別姓名を記せば左の如し。

日本畫科

吉田清二△久保田享二郎△岡田純二△中野隆一△丹羽賢△多田亨  
△濱谷榮次郎△清見陸郎△下林繁夫△古東謙吉△安井厚△野田武雄△中島彦△青山扶

西洋畫科

田邊至△大村周二△田中良△香田勝太△齋藤萌△中溝四郎△三宮  
知義△河野繁市△井上六郎△佐々木直哉△三隅禎三郎△大川隆男  
△長野靖彦△小川長四郎△加藤靜兒△伊賀氏廣△北古賀順橋△中  
井金三△内田伴二郎△長谷川昇△山下均△猪飼公正△大谷浩△關  
本一平△黨新三郎△藤田嗣治△新井完△坂井戒爾△脇龜太郎△岡  
田高郎

彫刻科

津村央喜△松村秀太郎△清水太助△松井信次△大藤定介

圖按科

飯田徳三郎△辰巳銀二△山岡隆芳△益田和雄△鈴木範三△桑村伸  
藏△高橋要△今野清三郎△窪島政明<sup>男</sup>

金工科

岩崎文七△蒲生鐵男△佐藤省吾

鑄造科

鈴木文衛△桑野寛

漆工科

岡一利△三木榮△吉野富雄△古川茂一

○撰科生の募集 今回豫備科生徒の終末試験修了の結果、改正規則  
に依りて、撰科生を募集することとなり、入學人員を左の通り定め  
られたり。願書差出期日は、八月廿八日より九月五日迄とし、入學  
試験は九月十日前後施行せらるゝといふ。

日本畫科 四人 西洋畫科 五人  
彫刻科 七人 金工科 三人

鑄造科 五人

此他圖按、漆工の二科は募集せず

○卒業證書授與式 同式は七月十一日午前九時より本校に於て施行  
せられたり。當日は久保田〔讓〕文部大臣も臨席せらるゝ筈なりし  
が差支のため、木場次官代理として臨まれたり。式の次第は例の如  
く正木〔直彦〕學校長の式辭ありて、昨年以來の本校の出來事をも  
報告せられ、次で卒業證書を授與せられ、又來學年の特待生に證書  
を、精勤者に其賞狀を授與せられ、次に正木學校長の訓諭、木場文  
部次官の祝詞、卒業生總代脇坂安之氏の答辭ありて式を終り、來賓  
總代を接待室に請して茶菓を饗せられ、夫れより隨意に卒業製作、  
生徒成績品を觀覽して茲に當日の事全く畢れり。今當日陳列したる  
卒業製作及作者、特待生、精勤者の姓名を録すれば左の如し。

○卒業生姓名及卒業製作目錄

日本畫科

香椎の宮	本科	毛利 教定	東京府平民
技藝	天	護城 惠滿	廣島縣平民
秋色	同	有安 助二	神奈川士族
武甕槌	命	牧野 左武	茨城縣士族
妙音	同	前田 千寸	高知縣平民
昭君嫁	胡	井上 良介	山口縣平民
妙樂	撰科	勝田 良雄	福島縣士族
榮譽ナラズヤ	同	三浦 孝	東京府士族
讀誦	同	金子朔太郎	東京府士族
能樂	屋	同	古賀源四郎
			佐賀縣平民

櫻下雙鷄	同	木村 鑢吉	京都府平民
佐保姫	同	伊藤 豊吉	東京府平民
落日	同	石島文太郎	茨城縣平民
西洋畫科	同	吉田 正七	靜岡縣士族
西洋畫科	同	橋口 清	鹿兒島士族
自畫肖像	同	野田 昇平	鹿兒島士族
自畫肖像	同	薄 拙太郎	福岡縣平民
自畫肖像	同	丸野 豊	福岡縣士族
自畫肖像	同	脇坂 安之	兵庫縣華族
自畫肖像	同	關 精一	茨城縣平民
自畫肖像	撰科	岸畑 久吉	三重縣平民
自畫肖像	同	久万 盛幸	高知縣士族
自畫肖像	同	齋藤 豊作	埼玉縣平民
自畫肖像	同	龜山 克己	東京府士族
自畫肖像	同	飯澤傳之丞	山形縣平民
圖按科	同		
婦人客間裝飾圖案	本科	十二町貞吉	富山縣平民
婦人用四季服裝	同	澤田誠一郎	京都府平民
模樣圖案	同		
彫刻科	同		
白 箸 翁	本科	竹内 友吉	富山縣平民
裸體力士	同	竹内 定吉	富山縣平民
覺 悟	同	石川 確治	山形縣平民
出雲のお國	撰科	來海篤次郎	島根縣平民

蓮生坊 同 田嶋 珪三 福井縣平民  
 就 縛 同 佐々木榮多 神奈川士族

彫金科

アルミニウム地 本科 川部 榮治 山形縣士族  
 臙銀張分雪中 撰科 前田 耕治 香川縣平民  
 鴛鴦の圖卷葉箱 同 正木 金吉 東京府平民

鑄金科

銀製菊の圖香爐 同 重田進十郎 愛媛縣平民  
 自 鑄 像 撰科 横田 秀一 東京府士族  
 卓上瓦斯燭臺 同 重田進十郎 愛媛縣平民

漆工科

蠟色地七夕圖硯箱 本科 常木 新藏 福島縣平民  
 蠟色地繪壇に 撰科 勅使河原德治郎 東京府平民  
 菊蒔繪提筆筒

○特待生

豫備之課程(日) 高木 左直 豫備之課程(日) 香川 敬事  
 同 (西) 山脇 信徳 同 (漆) 高中 文助  
 同 (漆) 豊島 銳郎 日本畫科一年 武藤 直信  
 日本畫科二年 山田 廉 西洋畫科一年 太田喜二郎  
 西洋畫科二年 南 薫造 西洋畫科三年 森田龜之輔  
 圖按科二年 君島金三郎 圖按科三年 森垣 榮

○精勤賞狀受領者

彫刻科一年 藤川 勇造 彫刻科二年 小倉右一郎  
 彫刻科三年 畑 正吉 彫刻科二年 八卷於菟三  
 豫備之課程(日) 小森 研二 同 (日) 香川 敬二

同	(日) 太田益三郎	同	(日) 竹田豊太郎
豫備之課程(圖)	江澤 茂信	同	(漆) 高中 文助
日本畫科一年	武藤 直信	同	高桑 純吉
同 二年	山田 廉	同	森田 靜也
同上	鹽崎 一郎	同上	相馬 正巳
西洋畫科二年	斯波 義辰	圖按科二年	鈴木 善夫
彫刻科四年	竹内 定吉	同上	石川 確治
日本畫撰科二年	小村 泰助	彫刻撰科三年	田中 良雄
彫刻撰科四年	來海篤次郎	漆工撰科三年	市島富太郎

○卒業生  
○特待生  
○精勤者  
○特別人員一覽

日本畫科	本科	六	四	一〇
西洋畫科	本科	八	〇	一
彫刻科	本科	六	四	一
圖按科	本科	五	〇	〇
彫金科	本科	三	三	二
鑄金科	本科	三	〇	二
鑄金科	撰科	二	二	二
鑄金科	撰科	一	〇	〇
鑄金科	撰科	〇	〇	〇
鑄金科	撰科	〇	〇	〇
鑄金科	撰科	〇	〇	〇

漆工科	本科	一	二	一
撰科	一	〇	一	
小計	一九	一六	一六	
撰科	二一	〇	四	
總計	四〇	一六	二〇	

○外國人の入學 來る九月より暹羅國人二人本校へ入學の筈、一人は漆工撰科へ、一人は彫金撰科なり。

○東郷大將へ贈呈の感謝狀 前號に記したる如く、去六月一日の決議に基きて贈呈すべき感謝狀は此程漸く出來せり。全軀は卷物仕立にして、表は百足虫模様の緞子を以て装ひ、見返し奥とも金表装にして、見返しは川端〔玉章〕教授の筆に成り、海邊岩上の鴉を畫き、奥へは荒木〔寛畝〕教授が日の出に浪を揮毫せられ、之を桐製表の筈に納めたり。其文左の如し。

波羅的艦隊ノ來航ハ敵國カ精銳ヲ盡シテ一ニ戰局恢復ノ望ミヲ屬シタリシ所 國家ノ安危モ亦實ニ其ノ戰果ニ繫レリ 而シテ我聯合艦隊ハ敵艦隊ヲ日本海ニ邀撃シテ遂ニ克ク之ヲ殲滅シ世界ノ耳目ヲシテ聳動震駭セシム 是レ固ヨリ

皇上ノ稜威ニ依ルト雖亦閣下ノ妙計神策ト麾下諸士ノ勇剛忠烈ト相俟チタルニ由ラズンバアラズ 洵ニ史乘ノ光輝曠古ノ偉績ニシテ誰カ感喜歎美セザルモノアラシヤ 本校職員生徒一同茲ニ本日ヲトシテ一堂ニ會シ戰捷ノ効果ノ奮ニ國民ノ輿望ニ副ヒ敵國ノ屬望ヲ空ウセメンタル現下ノ戰局ニノミ止マラザルモノアルヲ思ヒ滿腔ノ熱誠ヲ以テ赫灼タル諸士ノ偉勳ヲ頌シ謹ミテ賀意ヲ表ス

明治三十八年六月一日

東京美術學校校長 正木 直彦  
聯合艦隊司令長官 東郷平八郎殿

東京美術學校近事〔四一〕。M・三八・一〇・一七]

○前號掲載後に於ける職員の動靜左の如し

七月二十七日、教授川之邊一朝氏は、高等官四等に昇叙せらる。

同月三十一日、囑託上原六四郎、森省吉の兩氏、本校の都合にて解囑せらる。

八月廿四日、雇加藤橋松氏、依願雇を解かる

同卅日、古宇田〔実〕教授は、從七位に叙せらる。

九月十一日、川之邊教授は、正六位に昇叙せらる。

同月十三日、川之邊教授、願に依り本官を免せらる。

同月二十日、藤島〔武二〕助教授は、圖案研究の爲、滿四ヶ年間、

佛伊兩國へ留學を命せらる。

○辻村延太郎氏の佛國渡航 同氏は佛國ガイヤール氏の招聘に應じ、來る十一月十八日藤島氏と共に、本邦を出發して、渡航の途に上らるゝ由に聞く。

○再入學 本校卒業生及元本校生徒たりしものにして、本學年始めより再入學を許されたる諸氏左の如し。

彫刻科卒業生 日本畫科一年へ 柴野 健作

同 西洋畫科一年へ 高村光太郎

元日本畫撰科生 日本畫撰科へ 小林源太郎

○本科入學 名古屋縣立工業學校卒業生中井鉦作氏は、特に試験の

上、圖案科へ入學を許されたり

○撰科及圖畫講習科入學 先頃募集の撰科入學試験に及第して入學を許されたる諸氏並に清國其他の外國人にして撰科へ入學したる諸氏と、圖畫講習科の入學者左の如し。

日本畫撰科

大久保應洋 山内金三郎 萬谷 幸作

西洋畫撰科

森田太三郎 本吉 勝造 伊島正三郎 望月 桂 安宅安五郎

彫刻撰科

朝倉 靜麻 井上 直伍 牧野 國助 石井 鶴三 大友 哲夫

鈴木 要造 小堀 正徳

金工撰科

原田 縫吉

鑄造撰科

太田 靜一 後藤 駒雄

圖畫講習科

淺井 重一 篠原 良八

各撰科へ入學の外國人

西洋畫撰科へ 黃輔周（清國人）

金工撰科へ チャルン、スラナート（暹羅國人）

漆工撰科へ ポンプー、ワナード（同國人）

同 エス、エヌ、ボース（印度人）

○撰科の應募者と入學者の數 撰科入學者の姓名は前項記載の如くなるが、應募者の人員等は左の如しといふ。

撰科名	志願者	入學者	撰科名	志願者	入學者
日本畫	二一	三	金工	一	一
西洋畫	二二	五	鑄造	二	二
彫刻	八	七	計	五四	一八

但し外國人は本表以外とす

東京美術學校近事〔四一—二。M・三八・十一・一五〕

○職員の動靜左の如し。

十月七日、助教辻村延太郎氏は、本校教授に任せられ、高等官八等に敘せらる。

同月十一日、荒木榮治氏、雇を命ぜらる。

同月十四日、兼て外國留學中なりし陸軍歩兵少尉大築千里氏は、本校教授に任せられ、高等官六等に敘せらる。擔任は工藝化學なりといふ。

○卒業期生徒修學旅行 本年も亦例に依り各科卒業期生徒の、奈良京都の修學旅行は、九月十四日より同月三十日迄施行せられたり。指導監督のため出張したる職員は、大村〔西崖〕教授、香取〔秀治郎〕講師、屋代〔鉞三〕書記の三名にして、生徒は本科生十九人、

撰科生五人にして、總員二十七名なり、今其巡覽せし處を畧記すれば奈良縣下にては奈良市及其附近の社寺、法隆寺、長谷寺、多武峯〔談〕、淡山神社より、岡寺、橋寺、飛鳥寺を経て橿原神宮の邊、當麻寺等にして、奈良巡覽を終るの日紀念の撮影をなせり。京都府下は宇治の平等院、黄蘗山萬福寺、日野法界寺を経て京都市に入り、市

内有名の各社寺並に南は醍醐三寶院、北は大原の三千院、寂光院、西は花園、小室、嵯峨の附近より、梶尾、榎尾、高雄を経て嵐山に至る間の社寺等なりき。奈良に在るの日、本校卒業生にして、國寶の修繕に従事せらるゝ新納忠之介氏が、東大寺、興福寺、法隆寺の觀覽其の他に關して、大に便宜を與へられ、中島袈裟彦、松原象雲、明珍恆男の三氏も亦種々幹旋せられたるなどは、一同に於て感謝に堪へざる所なりしと。

○本校設置紀念式 十月四日午前九時より本會俱樂部に於て其式を行ふ。一同式場に着席するや、正木校長は式辭を述べらるゝと共に、徳川幕府の瓦解の際より説き起し、明治の今日に至るまでの、世運の變遷より之に伴ふ美術の盛衰消長、及本校創立の原因等を陳べ來り、且現下の美術は、本邦の位地及軍事其他の發展に比するに、未だ相與に比肩するに足る程に進まざるを以て、美術家たらんものは、此際に於ける國連の隆興と共に、小規模に齷齪せずして、宜しく奮勵一番美術の大發展を圖らざるべからずとの旨を説かれたり。尋て卒業生板谷嘉七氏の在校當時の懷舊談、山脇荷聲、山本鹿洲兩氏の演說等あり。了りて一同に茶菓を饗し。正午少しく過る頃退散せり。

○白濱〔微〕留學生の英國着 同氏は八月廿九日ポストンを發し、九月六日英國龍動へ着せられたるよし、其宿所は左の如し。

c/o Mrs. Pale, 102 Haverstock Hill,  
N. W., London.

○日本畫科展覽會への褒賞 昨年四月日本畫科職員生徒は、恤兵部へ獻納のため繪畫展覽會を開き、其純益金二百二十五圓餘を獻納し

たる廉を以て、先頃同會へ三ツ組木杯壹組を下附せられたり。

○西洋畫科職員卒業生生徒への褒賞 本校西洋畫科の職員生徒一般は、日露開戦以來毎月一人十錢以上を醸金して恤兵部に獻納せしが、猶夫にても足れりとせず、昨年五月恤兵繪畫展覽會を開設し、其純益金三百二十餘圓を各卒業生生徒の出品畫の數(一面に付十錢)及其奔走盡力の多少に按分して割當て(但職員は盡力の按分に與るを避けたりと)連名にて之を獻納したるに、先頃木杯一個づゝ及賞狀を下附せられたり、其人名は左の如し。

木杯及賞狀を下附せられたる者

薄拙太郎△野田昇平△丸野豊△佐藤十字朗△岸畑久吉△龜山克己  
△森田龜之輔△市川誠一△大槻式雄△大給近清△平井武雄<sup>男</sup>△榎本  
彦△山下兼秀△尾崎彦磨△マリー・イーストレーキ△太田喜二郎  
△川北元英

賞狀が下附せられたる者

黒田清輝△森岡柳藏△和田三造△橋口清△西三雄△關精一△脇坂  
安之△山下新太郎△齋藤豊作△猪飼俊二△久萬盛幸△兒島虎次郎  
△辻永△江南武雄△山本鼎△伊藤直和△南薰造▽斯波義辰△永田  
二郎△小畑橋策△大塚豊三郎△櫻井義功△藤田義雄△小倉三郎△  
佐藤勉△大久保健兒△中野營三△柴田三郎△松林千里△中澤弘光  
△跡見泰△小林鍾吉△郡司卯之助

○直轄學校生徒の他學校入學受験 十月二十八日省令十八號を以て、左の通り文部省より發布せられたり。生徒諸氏は深く注意せらるべきなり。

文部省直轄學校ノ生徒ニシテ豫メ學校長ノ許可ヲ受ケス他ノ文部

省直轄諸學校ノ入學試験ヲ受ケタルトキハ其ノ入學試験は無効ト  
ス

明治卅八年十月廿八日

文部大臣 久保田 讓

東京美術學校近事〔四一三。M・三八・十二・一四〕

○教授の新任 白山福松氏(號松哉)は、十一月一日本校教授に任  
ぜられ、高等官六等に敘せらる。

○大澤〔三之助〕大尉の解隊 本校教授の同氏は、十月三十日を以  
て召集を解除せられたり。

○辻村〔延太郎〕藤島〔武二〕兩氏の出發 辻村教授、藤島助教授  
は、共に十一月十八日午前七時の汽車に搭じて新橋を發し、佛國渡  
航の途に上られたり。

○出征諸氏の動靜 先年來出征中なる羽田〔禎之進〕中尉は十一月  
廿一日新宿を通過して仙臺に凱旋せられ、石井〔吉次郎〕中尉は同  
月廿五日東京に旋凱せられ、増井〔兼吉〕計手は遅くも十二月中に  
は凱旋せらるべしとのことなるが、獨り千頭〔庸哉〕計手のみは軍  
務の都合にて、或は來年二三月頃ならば、凱旋するの運びに至ら  
ざるべしといふ。

○結城〔素明〕助教授の近況 同氏は留守近衛師團司令部に在り  
て、日々軍務に執掌せられ、先頃曹長に昇進の趣にて、出征野戦隊  
の凱旋後ならばは解隊せられざるべければ、自然解隊は來年なるべ  
しといふ。

○観艦式拜観 十月二十三日に施行せられたる東京灣の観艦式拜観のため、本校にては拜観の場所を鶴見停車場の南方なる、神奈川縣橋樹郡生見尾村二見臺の中腹に卜し、有志の者は同所に集合して拜観せり。同所は式場の正面に當り、艦船離合の狀況等明瞭に知るを得たり、式場の光景等は當時の新聞紙上等にあるを以て今茲に之を贅せず。

○本年秋季の修學旅行 本年の修學旅行は群馬縣下榛名妙義地方と決定せられ、十月三十日午前六時五十分を以て、職員生徒一同上野驛を出發し、午前十時四十分前橋驛に着しぬ。前橋よりは徒歩して利根河の沿岸を遡り、澁川村を過ぎ伊香保に至りて一泊す、翌三十一日は伊香保を發し、清溪のほとり、錦なす紅葉の山間を經、或は見渡すかぎり尾花のうらがれし山路をたどりて、榛名湖畔に出で、榛名神社に詣て、寶物を觀覽し、榛名町に宿れり、明くれば十一月一日なり、此日は七里の山路を踰ゆるなればとて、朝七時前より榛名町を出發す、妙義町に至るの間は唯迂餘たる山坂のみにて、さしたる眺めあるにもあらず、面白からぬ道なりき、妙義町にやどりし翌日(二日)は、名にしおふ妙義の山巡りなればとて、携へし荷物皆皆宿屋に託し置きて各身輕に出でたち、朝の六時より登り初め、金洞山(一に中の嶽といふ)を跋涉し、或は妙義山(大字のある山)を攀ぢ、妙義神社の寶物を觀覽し、それより松井田の停車場に出で、汽車にて歸京す、上野に着したるは二日の夜九時頃なりき。此行伊香保の入口なる美仙橋の濶に於て、同人十數名にて兎を生捕りたるが如きは時に取りての好獲物にして、旅行に大なる興味を添へたり。

○職員生徒の奉送迎 十一月十四日伊勢へ 行幸あらせられしに付、當日本校職員生徒一同は、櫻田門外遞信省用地前へ集合して奉送せり。同十九日 御還奉の時も同様奉迎す。

○凱旋門裝飾の依囑 下谷區にては今回上野公園入口に、半永久建設の凱旋門を作ることとなり、其裝飾の圖按及雛形製作を本校へ依囑せられたるを以て、古宇田「実」教授主として之に當り設計中なりしが、此程考案も決定したるを以て、不日建設の運びに至るべし。其設計の大軀はクラシック式の門にして、總高さ七十尺、間口八間奥行四間、上部の中央に勝利神を置き、其左右に模様風の獅子を配し、ペディメントの中に翼を廣げたる金鷄を据え、内部天井に壁畫を圖する筈にして、夜間は附近の高處より、探照燈を以て之を照らすの計畫なりといふ。

#### 関連事項

##### ① 工芸化学教室整備と大築千里起用

本校では従来工芸各科の生徒に、「応用化学」の授業を課し、上原六四郎が指導にあたっていたが、明治三十八年七月、上原は囑を解かれ、同年十月に大築千里が教授として起用されるや、急遽研究、教育体制の整備がすすめられた。後出「東京美術学校近事」(355頁)に記されているように、従来鍔金科の一部にあった化学室を廃し、工芸科塑造教室(護国院寄りの一棟)を増改築して工芸化学教室とし、教育に必要な設備を整えたのであった。

大築千里は明治六年東京小石川に生れ、同三十年東京帝国大学工科大学応用化学科を卒業。陸軍技師(東京砲兵工廠製造所所員、目黒火